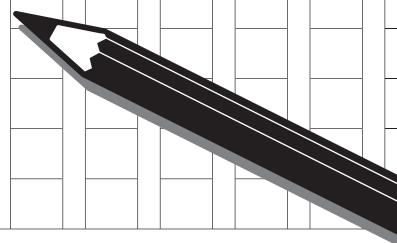


令和7年度

# 第11回 藤原正彦 エッセイコンクール



## 入賞作品集



姫路文学館



姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第十回目を迎えた今回は、全国から一九三一点の力作が寄せられました。

「生きることとは創ること」——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自分自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

## 目次

■ 中学生部門		■ 高校生部門		■ 一般部門	
最優秀賞	「五時間目という戦場」	最優秀賞	「本とともに」	最優秀賞	「いのちを生きる」
優秀賞	「月桃」	優秀賞	「私の一步」	優秀賞	「つなぐ」
佳 作	「散髪代は三千円」	佳 作	「画面に映らない幸せ」	佳 作	「父への詫び状」
兵庫県	姫路市立琴陵中学校	兵庫県立姫路西高等学校	山梨県	南アルプス市（無職）	山梨県
青森県	青森市立西中学校	駿台甲府高等学校	東京都	練馬区（主婦）	東京都
兵庫県	姫路市立広畠中学校	青稜高等学校	東京都	井口 未来	三重県
一年	田内 鳩太	一年	塚田あすみ	二年	日沼よしみ
一年	尾上 直孝	一年	平野 琴葉	一年	…
一年	平山 心陽	一年	河野 陽菜	一年	…
一年	…	一年	…	二年	…
11	…	19	…	23	…
4	…	15	…	30	…
…	…	…	…	34	…
…	…	…	…	38	…

第十一回 藤原正彦エツセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 姫路市立琴陵中学校 二年

## 五時間目という戦場

尾上 直孝

昼休みが終わると心にひとつ覚悟が生まれる。「よし、今日こそは…最後までしつかり集中する！」そう思いながら席に着く。教科書を開き、ペンを手に握る。教室はさつきまで楽しく明るかつたのに、今では空気がガラッと変わり、窓から見える風景がやわらかくにじんで、目の前の景色が少しづつ遠くなつたような気がした。

五時間目が始まつて十分ぐらいになると、視界がまろやかに、先生の声が音楽のBGMのように耳に流れこんでくる。ちょうど良いテンポ、音量、内容によつて頭の中が、段々と穏やかな海のようになつっていく。気付けば、ペン先がノートの隅にぐるぐるとした謎の模様を描き始めている。周りを見ると、皆は眞面目に授業を受けているように見える。でも、近くの友達の首が少しづつ角度を変え始めたのを見つけてしまつた。そして、ガクン！と戻つてくる首。そう、やつもまた、五時間目に現れる悪魔と僕と同じように戦つていたのだ。午後の教室には、見えない何かが漂つてゐる。日差しは優しくて空気も暖かい。集中しようと思えば思うほど、意識が上方にふわつと浮かんでしまう。こうなると、黒板

の文字はもう記号にしか見えない。ノートをとっている手がまるで他人の手のようだ。さつきから書いている文字は、もう自分でも読めない。もしも未来の考古学者がこのノートを発見したら、「これは古代の悪魔と戦った戦士の記録だ！」と思うかもしれない。

気付けば、ぼくの心はどこか別の場所を旅している。空を飛んでいたり、家にいるような気分になっていたり、それが現実ではないと気付く頃には先生の話していた内容のほとんどは風に流されている。

けれど、時々現実に戻ってくる。「ここ重要ですよ。」「あつ、間違えた！」という先生の言葉が、現実へロープを引つぱるように響く。ハツとして体勢を立て直す。急いでノートに線を引く。でも、その線もまっすぐな直線ではなく、ゆらゆらとゆがんでいるようにしか見えない。まるで、僕の意識のゆがみが線となつて写し出されたかのようだ。

どうすればこの戦場で生き残れるのだろうか。もちろん夜によく寝る、朝食、昼食をしつかり食べる、といった方法はある。でも、それでも、実際には負けているのだ。

そこで僕なりに対策を考えてみた。まず試してみたのは、体をつねるという作戦だ。これはわりと効果があった。つねっていると目が覚める。次は息を止める作戦だ。20秒なら大丈夫だが、あまり無理をすると別の世界に行ってしまうので少し危険だ。それならと、最近しているのは、実況をつけることだ。頭の中でナレーションをしてみる。「ただいま

彼のまぶたは必死に重力と戦っています。しかし、ペンはすでに止まっている!」こうしていると楽しくなってきて、ごまかせる。でも、一番効果があったのは、さっきまで机に顔を伏せて悪魔との戦いに秒で負けていたやつに、「おまえ、さつき一瞬いなかつたぞ。」と言わることだ。これは、とても屈辱になり、心の中で「おまえだけには言われたくなあわ!」という怒りがこみ上げてくる。しかし、そのうちまた悪魔におそわれる。

なぜこの時間に限って、頭がふんわりとしてしまうのか。朝は大丈夫だった。昼休みまでは完ぺきだった。なのに、この午後の一時間だけ、魔法がかかっているみたいだ。結局、あらゆる対策をしてみても、今の所負け続けている。しかし、明日もまた、ぼくは五時間目に挑む。教室という名の戦場で、夢の旅に出かけないように。

正直ほめてほしいと思う。眠気と戦うことは、つまり、それだけ頑張ろうとしていることだからだ。誰にも見えない静かな努力を僕はしているのだ。明日は今日よりほんの少しだけ意識を遠くに飛ばさないようにしよう。そんな小さな決意を胸に、今日の終わりのチャイムを聞く。

これは大人になつたらいつのまにか忘れてしまう時間かもしれないが、ノートの隅に書いた落書きが、今までとこれから自分を全て覚えてくれるはずだ。ぐるぐるとした謎の

模様が果たしてこれからも毎日少しづつノートの隅に増えつづけるのかどうか、ぼくの戦いはこれからも続していく。

中学生部門

優秀賞

青森県 青森市立西中学校 一年

月桃

平山 心陽

月が、三日月なら、綺麗だと感じる。月が、皓月なら皓月千里。息を呑む。皓月とい  
う言葉は満月を表すには丁度いい言葉である。満月の周りは白く光っているからだ。その、  
白い光をじっと見つめて、目を閉じても、ぼんやり月の丸が瞼の裏に浮かぶくらい白く、  
光り輝いているから、満月には皓月という言葉が丁度いいと私は思う。

向かいの家の屋根は、てらてらと光を照り返していて、私は目を輝かせました。夜、そ  
れが起こった場合は決まって、満月と決まっているからです。そういう満月は私の影さえ  
もはつきり、地面に落ちる位、眩しい満月と分かっているためだからだ。それ位に月が明  
るければ不思議と気持ちも明るくなるもので、満月を見る為に屋上の、塀の上へ座つた。  
夜にはおかしい明るい地面を見れば、満月と確信して、空を見れば、それ、ほら、綺麗な  
満月！幾度となく、綺麗な、今日のような満月を見て來た。中秋の名月にも劣らないよう  
に光り輝いている、満月であった。きらきら光るお星さまは満月の引き立て役に成り下が  
るほかは無い。それくらい皓月千里の満月であった。月の、右下にあるきつと、今飛び立つ

たばかりの飛行機の光。ビル群の窓の光。それらよりもずっと満月の方がてらてら、太陽の光を照り返していて、秋風あきかぜを吹かしていた。

三日月を子供と呼び、満月を大人と呼び、新月を老人と呼ぶのならば、月が満ちていくその姿は成長と呼べるだろう。その成長は、二ヶ月で一回転してしまくらに、くるくるころころ欠けて埋めてを、繰り返している。時間もそれくらいころころ回り続けているからか、もう九月。四月の桜はもう枯れて、虫に食べられている葉桜しか、残っていない。その横で松の木が毛虫を駆除するためだろうか、おおきな松ぼっくりを沢山付けた木が横たわっていて、今日の、晴れない空を見ていた。

晴れない空をいくら待つても雲は退いてもくれやしない。天の川を見ようと、中秋の名月を見ようと、その周りには何時いつも雲が横たわっていて、それが退くのを待つていればきっと朝になつてしまふ。だから運よく見れた日の月がより一層、綺麗に見えるものです。午前中の白い月。夕方の気が早い薄黄色の月。真夜中の皓月。新月のただ静かな夜中。車窓から見える中途半端な形の月。月は見る時間、場所によつて何もかも変わるものだと毎度毎度本当に思う。それこそ、夏の月よりも冬の、空気がしん、と冷え切つた所にちよん、といる月の方が私は好きだ。鼻に突き抜けてゆく冬のだけの冷たい空氣。手足は真つ赤で、

顔は桃みたいに、赤いと思える気温。その空気の、夜の雰囲気。それで、月が上がつていればもつと完璧、と思えるからだ。完璧すぎて時間も忘れてしまうから、足は感覚が消え、月が雪と私を照らして、あの、電柱の五センチくらい上にきらきら光つていてる月を見てしまった事も冬には、しばしば。

月は、私にとって、とても大事で、感性を豊かにしてくれるもので、素敵なものだから、あつちのスーパーの電気が消えるのを待つていれば、月はもう沈んでしまう。月はそれくらい電気に弱くて、存在が薄れてしまうが、その景色は何時も見える、景色の様な気がして、安心感と言うべきか、そのようなものも与えてくれるものだ。月は、私にとって身近な存在で、だから多分、太陽よりは近い存在にいる。だから、ふと、空を見上げて月がそこには、どことなく嬉しい気持ちになつてしまつるのは私だけだろうか。今日の月は、皓月千里だけれど、少しもしたら、皓月千里の満月は黒い、羊雲の布団の隙間から、ちらちら顔を出すばかりだった。辺りはもう、真っ暗で秋風が、私の隣に座つていた。秋風は、もう、冬の顔になつていた。

中学生部門

佳作

兵庫県 姫路市立広畠中学校 一年

## 散髪代は三千円

田内 鳩太

三千円。それはぼくの行きつけの散髪屋の中学生料金だ。

その散髪屋に行き始めるようになつたのは、もともとはぼくの髪の伸びの速さが原因だつた。半月と少し程で、髪はかなりの毛量になる。伸び切つたぼくの髪を一言で表すなら、「爆弾」がピッタリなレベルだ。

そのため以前までは家から少し遠い店へ、母と車で通つていたのだが、

「半月のペースで送り迎えするのは大変やねん」

という母の一言で、現在の家から近く歩いて行ける散髪屋へと決つたのだった。

そんなわけで今の散髪屋へと行くことになつたが、初めて店内へ入る時は緊張した。店の人はどうだろう：優しい人がいいな：漫画とか雑誌とか置いてあるかな：。最後は緊張というよりかは期待になるけど。

「こ、こんにちは：」

恐る恐るドアを開ける。

「お、こんにちは。初めまして」

中には他のお客様の髪を慎重に切りながら、笑顔でいさつを返してくれた男の人がいた。年齢的には「おっちゃん」という呼び名が正しいだろうか。前のお客さんは終わりかけだったようで、すぐにぼくの番が回ってきた。なお予約の時に、母にどんな風に切るかは伝えてもらっている。

「じゃあ、事前に伝えてもらつた切り方で切つていくなー」

おっちゃんはそう言いながら、流れるように下準備をしていた。ためらいなく準備をする姿に、ぼくは目をうばわれた。

簡単にシャンプー等を済ませ、いよいよ髪を切つていく。時にバリカンで大胆に、時にハサミでゆつくりと。その度、ぼくの爆弾と化した髪の毛はきれいに切られていった。さながらおっちゃんは爆弾処理のエキスパートである。

そんな風な出会いで始まつた散髪屋とおっちゃんとの関係。あれから何年か経つたけど、今もある散髪屋に通い続けている。それに、おっちゃんとも次第に打ちとけてきて、最初の頃は会話も少なかつたが、今では学校の事を話したりして和やかな空間が生まれるようになつた。感触がものすごくすぐつたくて大笑いしながら行つた顔そりも、今は堂々と、どや顔の一つでもキメながらでも大丈夫。ぼくにとつて散髪屋へ行くことは、一つの

リフレッシュにもなつていた。

そんなある日、小学六年生の三月のことだ。いつものように散髪を終え、レジの番をしてくれるおばちゃんに料金をわたす。

「はい、いつもありがとうございます。：：そういうええ、来月から中学一年生やんな？」

「あ、はい」

「なら、来月から中学生料金になるから、三千円になるで、忘れんといてな」

三千円…。高い…。

帰つてこの事を母に伝えると、

「おばちゃんも抜かりないなー」

と笑つていたが、その声には落胆の色が見えた。お米だけでなく、散髪の値段まで上がるとなると、さすがに苦しいのであろう。

その夜、我が家で会議が開かれた。議題は「散髪屋、これからどうしていくのか」である。ほぼ一ヶ月に一度、三千円を払うのはかなり厳しい、ならいっそ散髪屋を変えるのはどうか、というわけだ。丁度我が家の近くにはもう一軒散髪屋があり、値段もお手頃なので、こつちはどうかと発言するのは母だ。

しかし、ぼくはその考えをつっぱねる。もちろん、値段だけで見れば散髪屋を変える方がお得だ。でも、決してそうではないことが、何年も通い続けてぼくは分かった。

ぼくは髪を切られながら、おっちゃんと会話をするのが本当に楽しい。テストについてアドバイスをもらつたり、おっちゃんが時に自分の子供の頃を思い出して話したりする。そんな姿を見るのが楽しいし、うれしい。自分との会話でこんなにもワクワクしながら話してくれるおっちゃんの散髪屋を離れるのは個人的に申し訳ない気もする。

そう母に伝えると、母は

「じゃあ、今の散髪屋で行こか」

と快だくしてくれた。

三千円になつた今も、ぼくはこの散髪屋へ通い続けている。おっちゃんと会話をつつ、散髪をしてもらう。そこに三千円以上の素敵な時間が生まれると思う。

高校生部門

最優秀賞

兵庫県立姫路西高等学校 一年

## 本とともに

平野 琴葉

文字だけの世界。そこに私はいない。つるりとした紙面に整然と並ぶ黒いインクは、私の脳内に、私でない誰かの視点を映し出す。現実と切り離されたその世界では、煩雜な日常の匂いはしない。本の中の世界。いつまでも浸つていてほしいのは、その静かな輝きが深く私を満たすから。

ついにやつてしまつた。いつかそうなると思っていた。本を読むのに夢中になつて、降りる駅を乗り過ごしたのだ。学校帰りの電車、満員の車内は雑然としていて、ラスト数ページに集中する私の耳に車内アナウンスなど入るはずもなかつた。車窓には、見たことのない景色と間抜けな私。それを横目で見ながら、今度からは集中しすぎないようにしようと、一応決意する。おそらく無駄だが。幼い頃からそうだ。ひとたび本に集中すれば、私の耳は何の音も拾わない。現実世界のすべては、私の視界の、思考の隅にすら映らない。私の目が映すのは、紙の上で私の知らない世界を描く、言葉たちだけ。

幼い頃、夢見る少女だつた私は、ファンタジーものばかり読んでいた。森の動物たちと

の冒険。もちろん主人公は動物の言葉がわかる。きらきら光るペンダント。はめ込まれた宝石には何らかの力が宿っている。木苺ジャムのパイ。庭でとれた木苺を使って大きなかまどで焼く。そんな幻想的な世界に魅了され、図書館に足繁く通つた。成長するにつれ、ファンタジーに加えて、ミステリー、伝記、ルポルタージュなど様々なジャンルを読み漁るようになった。表紙を開くたびに新しい扉が開き、ページをめくるたびに未知が流れ込んだ。どんなに遠い世界でも、本の中では鮮明だった。文字の並んだ平面のもつと奥、その先は、どこまでも輝いていた。日常から離れたまっさらな私を、抗えないほど惹きつける。私は目を逸らせない。知らない世界。私のいのい世界。いつだつて心を奪われていた。ふと顔を上げて、時計と目が合う。二時間も経つたらしい。心地よい読後感を目と脳の重さで感じながら、私の体に二時間ぶりの空気が入つてくる。私はこの瞬間が、最も嫌いだ。すでに私は青い髪の大魔法使いではなくて、世界を飛び回る医者でもなくて、悲しい理由で罪を犯したサラリーマンでもない、ただの普通の高校生だ。本を閉じたとき、取り巻く現実のすべてが一気に押し寄せてくる。机の上の解きかけの問題が目に入り、胸にじんわりと広がる罪悪感。私が「時間に追われる大人」になつてしまつた証拠だ。中学生、高校生と成長するにしたがつて、宿題が増えて、テストが増えて、役割が増えて、時間が減つた。あんなに本が好きだったのに、本を閉じている時間が随分増えた。今まで家族の

ようだつたのに、私は本から離れてしまつた。本は私の「いちばん」だつたのに、もうそうとは言えない。本と私を繋ぐ糸が、段々とほどけてしまつていた。

いや、本当にそうなのだろうか。中高生になり、読書の時間の大部分は私が現実世界で生きる時間になつた。小学生の頃よりずっと単純でなくなつてしまつた日常には、たくさんの困難が待つていた。何度も変わる環境や、複雑になる人間関係、難しい勉強、部活動や生徒会での責任、どれもが私を苦しめた。もう嫌だと泣いたときも、しんどくて立ち上がりないときもあつた。それでも立ち向かい乗り越えてこられたのは、本が助けてくれたからだ。本から得た知識は私に自信をくれた。本から学んだ情緒は私自身を豊かにした。本を読む時間が減つても、今までに出会つた言葉たちは私を癒して、前へ進むための力をくれた。忙しくなつたからこそ気がついたことだ。文字の中の世界は、単に遠い世界を見せてくれるだけではない。「現実世界で生きる」ことを支えてくれているのだ。本と私は今もずっと、いつだつてずっと、繋がつていたのだ。

きっと、これから私の人生も、本とともににある。数学の問題に苦しんで苦しんで、未 来まで見えなくなつてしまつたとき、本は私に安らぎと確かな希望をくれるだろう。抑えきれないほどの嬉しさも、悲しさも、憤りも、喜びも、登場人物と泣いて、笑つて、昇華させるのだ。困難に打ち勝つたあの少女が、悲しみを乗り越えたあの親子が、私を導いて

くれる。多くの言葉たちは少しづつ心に降り積もり、自然と私をつくっていく。本は私にとつての栄養で、そのすべてが私の宝物なのだ。

文字だけの世界。そこに私はいないから、素晴らしい。そこに私はいないけれど、それでも繋がっている。本の力を借りて、強く現実を生きていく。表紙のその先にある静かな輝きは、私の行く先を照らし続けてくれるだろう。これからも、ずっと。

高校生部門

優秀賞

山梨県 駿台甲府高等学校 二年

## 私の一步

河野 陽菜

私って大人になれるのかな。未熟な自分を変えたいと思い始めてから数か月、何の成長もしていない自分に、息が詰まりそうになる。いつからか感じていた微かだった焦燥は、日がたつごとに、加速して膨れ上がっていた。夜、一人悶々と考えて、込み上げてくる不安をごまかすように目を瞑つて、いつの間にか眠気に負けている。眠るつもりもなく眠つて、朝5時にソファの上で、蒸し暑さに目を覚ます。何かしなくちゃいけないことが残つていたような。不安や焦りが一気に襲い掛かって、無理やり脳を覚醒させる。そうだ、課題。昨日手を付けないまま眠つてしまつたんだ。思い出して跳ね上がる心拍数。ぶわっと体温が急上昇するのを感じた。“もう間に合わない”その受け入れ難い確かな事実を、恐る恐る咀嚼する。息が浅くなる。また失敗したんだ。馬鹿、今度こそちゃんとしようつて、思つてたのに。日の出を待つ薄明るい窓の外に嘲笑われる。ぼやけた視界を振り切つて立ち上がると、覚束ない足取りで歩く。震えそうな手で雑な身支度を済ませ、机に向かつて時間ギリギリまで悪足搔き。遅刻しそうな私を怒鳴る母の声に責め立てられ、空欄だらけ

の宿題を鞄にしまった。家を出なければいけない時間を過ぎて、ばたばた荷物をまとめる私を見つめる失望の眼差しを、見なかつたことにして玄関を飛び出す。

学校へ向かうまでの道、太陽が強く照りつける夏。真っ青な空が鬱陶しく思えてしまう。こんなに明るいと自分のからっぽな中身を透かして見られそうで、落ち着かない心を宥めるために日傘を差した。情けない自分が誰にも気づかれないだろうか。気になつてくれ違う人の目線の先をこつそり窺つてしまふ。無意識に体が強張つていて、まだ着いてもいないのに大分疲労を感じる。学校は好きじやないし、何より終わらなかつた課題を持つて教室へ向かうのは憂鬱だ。「課題、ある?」係の人が回収にくる。「ごめん、無いです。」出来の悪い私が、私じやない誰かに知られてしまつた。当たり前に皆は出来ていることなのに、出来なくてはいけないことなのに。ちらりと横を見ると、テストに向けて勉強しているクラスメイトが目に入つた。手元のノートにはびっしり数式が書いてあつて、教科書からカラフルな付箋が覗いている。顔を上げると、目線の先で談笑する数人の女子生徒。手入れされた綺麗な巻髪を揺らして楽しそうに笑つてゐる。自分のなりたい姿のために努力ができる人たちは素敵だと思う。学校には、尊敬できる人がたくさんいる。そんな人たちが眩しくて、余計に自分が醜く思える。荒れた肌も、うねつた前髪も、誰にも見てほしくない。人と話すのも苦手だ。自分のよくない部分に気付かれて、気が気じやないか

ら。せめて、目くらいまともに見れるようにならなきやな。「あ、次移動教室じゃん」すぐ隣から聞こえた声で我に返つて、慌てて私も教科書を準備する。一番最後に教室を出て、みんなの背中を追いかける。みんな、はやいよ。過ぎていく時間に、私だけが取り残されているような気がした。

帰りのバスに揺られているときでさえ、劣等感に苛まれて穏やかにはなれなかつた。どうしてなんにもできないんだろう。私は得意なこともない。長所を尋ねられても何も答えられない。それどころか、当たり前のこともこなせないし、自分を変えるための努力もまともにできない。何度も反省しても、一人でぐるぐる考へても、どうせ私はこの先も変わらない。――どうせ。

“あれ？”堕落に抗うこと諦め始めた自分に気が付いて、ハツとした。私は自分を変えたくて出来ない理由を探していたはずだったのに、これでは本末転倒だ。つい先程頭に浮かんだ「どうしてできないのか」という疑問が形ばかりのものであり、答えを出そうだなんて端から思つていなかつたことに気づいた。私はきっと、これ以上自分に失望することが怖かつたのだと思った。意味のない自己否定は反省なんかじやない。出来ると信じても失敗する自分が嫌になつて、自分に期待しなくなることで逃げようとしたのかも知れない。このままでは駄目だ。私自身が諦めてどうする。向き合うことに躊躇していた自分に

喝を入れる。頭の中でこんがらがっていたものが少しづつ解けていくのを感じた。

なんだか久しぶりに一步踏み出せた気がする。他の誰かから見たら、こんなちっぽけな一步は価値にならないかも知れないけど、焦らなくていい。自分を信じて、自分のペースで歩いていけるのなら、それでいい。そうすれば、きっと大人にだつてなれるから。車窓から入り込んでくる西日が眩しい。それを避けるように俯いていた顔を思い切って窓に向ける。透かして見られたつてもう怖くない。歩き出すその先を見据えて、深く息を吸い込んだ。

高校生部門 佳作

東京都 青稜高等学校 二年

## 画面に映らない幸せ

塚田 あすみ

朝の八時、いつも限界まで詰め込まれた満員電車で私はイヤフォンをし、スマートフォンを握りしめる。後ろの人のカバンが背中にあたり、人の波に押されながら無言でSNSを開く。誰かのつぶやき、友達の楽しそうな写真、キラキラした投稿たち。「なんで私は」と眩しい世界と現実の自分とのギャップに、胸の奥からじわじわと虚しさが込み上げてくる。心の中で「もう見るのはやめよう」と何度も思うのに、指は止まらない。スクロール、スクロール、またスクロール。SNSは世界を広げてくれると同時に比較の対象を増やし、「もつと痩せなきや」「もつと勉強しないと」「自分は平凡なんだ」と自分を追い込む存在にもなる。息苦しさを覚えるその感覚こそが「SNS疲れ」というものなのだろう。

そんな私がSNSから距離を置くきっかけになったのは、ニュージーランドへの三ヶ月の留学だった。初めてインターネットの世界とほとんど触れない生活を送り、朝はホストファミリーに「おはよう」と挨拶をし、学校では直接顔を合わせて友達と会話をした。放課後はビーチを散歩したり、公園で風に吹かれたりする。寝る前にはスマートフォンではなく紙の本を開き、眠気が訪れるまで文字を追った。画面に映る情報の洪水から解放され

ただ目の前にある人や風景に心を寄せる時間は、なんだか小学生の頃に戻ったようでとても懐かしく、温かかった。

SNSのない生活を経験して気づいたのは「つながり」とは画面を通して得られるものだけではないということだ。むしろ目の前の人との会話や、自然の中で深呼吸する時間の方が心を満たし、自分らしさを取り戻してくれる。SNSで得られる承認は一瞬で消えるが人との対話や体験はじんわりと心に残り、人生を支えてくれる。もちろんSNSを完全に否定するつもりはない。新しい情報を得たり、遠くの人とつながったりできるのは大きな魅力だ。ただ、私たちはつい画面の向こうの「他人の物差し」で自分を測つてしまう。その結果自分の本当の気持ちや幸せを見失つてしまふのではないか。

ニュージーランドでの体験から学んだのは「比較」よりも「実感」を大切にする生き方だ。海辺の風の匂い、友達と交わした笑い声、ホストファミリーと食卓を囲んだ時間。正直このニュージーランドでの感覚を、これからも忘れずにいられるかどうかは自信はない。しかしSNSには残らないけれど確かに私の心を豊かにした瞬間。そうした小さな実感こそが、私にとつての本当の財産なのだと思う。

日本に戻り、再びスマートフォンを握りしめる日常が始まった。けれどもあのときの感覚を知った今、私は少し違う。スクロールする指を止め、本を開いてみる。イヤフォンを

外し、周囲の会話に耳を傾けてみる。何かが変わった自分を実感しながら今日も一日を精一杯生きていく。

## 一般部門 最優秀賞

山梨県 南アルプス市

## いのちを生きる

日沼 よしみ（無職）

無言館。三十年ほど前に、信州は上田市に建てられた戦没画学生の絵を展示する慰靈美術館だ。開館当初から知つてはいたが、史上最悪と言われるあのインパール作戦に従軍し生還した父からその凄惨さを聞いて育つた私は、よほど自分の気持ちが勝つて居る時でないと戦争による目前の死を覚悟した彼らの絵の前に立つことは無理だと思い続けてきた。今年、悲しいほど目に映る桜が美しく見えない。ふと、無言館が心に浮かんだのはなぜだろう。今の気持ちの沈み方くらいのほうがもしかしたら彼らの心情に寄り添い、共感できるかもしれない。浅はかにも、そんな気持ちだったような気がする。

四月初旬、柔らかな春の日差しが、まだ芽吹きの浅い木々の間を縫つて幾重にも交差するその先、小高いところに鎮まるようにひつそりと無言館はあつた。

そつとドアを押す。一瞬、ほの暗さにたじろぐ。けれど、目はすぐに慣れた。

大きなものでは百号を優に超える人物画、風景画が八十数点。ゆっくりと歩く。ほとんどの絵に、それを描いたときのエピソードが簡潔に書かれて添えられている。直近に迫つ

た徴兵への恐怖を語るものは一枚とてなく、淡々と、ひたすらに。それがかえつて痛まさを増幅させて、故郷の風景や、母、妹などに向けられたそれぞれの思いの極致が胸に迫つた。画学生たちの息遣いが聞こえてきそうな絵の前を歩む。立ち止まる。歩く。一步、二歩。分けても私の胸を突いたのは、恋人や新妻を描いた何点かの裸婦像だった。「帰つてきたら続きを描くから」と言いながら、入営の直前までその絵筆を離さなかつたという絵の前に、私は立ちすくむ。どんなにか生きたかつたであろう。どんなにか生きて帰つてほしいと願つたであろう。瞬時を惜しみ対峙した二人の、底知れぬ無念さや絶望にかられた絞り出されるような物言わぬ声に射すくまれて私は動けない。

と、そのとき、突然、弾けるように、突き上げるように、ある思いが私の胸の中に湧きあがつてきた。

そうか、夫は生きたいのだ。

戦没画学生の描いた絵の前に立ち、夫のことをこのように切実に思うとは想像もしていないことだった。

夫がパーキンソン病を発症して二十年が経つ。心身の自由を徐々に奪う進行性の難病で歩行が出来なくなつて久しい。人口肛門や胃ろうの造設は子供たちと相談しての結論だつた。認知症も進んだ夫は、そんな重大なことの意思表示も、もはや出来ないのだから。

それでも、家族の声や家のなかの音や匂いが夫に届いてこそその「夫らしさ」だと信じ、訪問医療に助けられながら自宅介護にこだわってきた私に、主治医からその限界を告げられたのは一年前のこと。容赦のない決断だったはずなのに、心ここにない虚ろな日々が続く。

入所した介護施設に日参し、残されている記憶の断片を引き出そうと、語り掛け、問いかける。思い出の写真を見せる。好きだった歌を口ずさんでみる。夫は、そのほとんどに目を閉じたまま無言だ。

あなたは今、どこをさまよい、何を思っているのか。なぜ自宅ではなく、ここにいるのか。私はなにかをまちがつていなか。

夫の顔を覗き込み、揺り動かしたい衝動に私が揺れる。限りなく寂しく、限りなく大切なひと時。夫は生きているのか、生きていかないのか。いつもその狭間にいるようで、やるせなさを抱えては、ふわふわと、落ち着きどころを見つけられない自分を持て余す。

そんな一切のもやもやが、この瞬間に吹き飛んだ。生きたくても生きられなかつた、あまりに理不尽に断ち切られたたくさんの命の無言の叫び声が「いのちを生きよ」と、私を搖さぶり続けた。

あたたかな夫の手は、握れば握り返す。呼び掛けに、小さな声で答える。私の名前を呼

ぶ。呼ぶ、呼ぶ、私の名前を呼ぶ。

夫は生きている。生かされている。生きたいと思つていて。その確信が、私の胸に熱くこみあげ、涙があふれ出てきた。

私は傲慢だった自分を心から恥じた。画学生の気持ちに寄り添うどころか、彼らの描いた絵にこのように励まされようとは予想だにしていないことだつた。

よろけそうな足取りを確かめつつ、私は外に出た。

見上げれば、来た時には気づかなかつた山桜が伸びやかに枝を広げ、春のさきがけを歌うように、小さな淡い花がうす水色の高い空一面を覆つてかすかな風に揺れていた。こんなに美しい桜の花を、私は、初めて見たと思つた。

## 一般部門 優秀賞

東京都 練馬区

## つなぐ

井口 未来（主婦）

堂々たる体躯に、白い歯がまばゆい笑顔の写真。「若い頃の俺もイケてるだろう。なあ、そりゃあ」お義父さんは、ニヤニヤしながら言つた。お酒が大好きで、大声で話し、笑いながら自身の禿頭をギヤグにするような、豪快な人だ。

今日もまた、クリームパンを探しながら、家中をよたよたと歩く。その足取りは、まるで赤子のようだ。「ここに、あつたんだがな。なあ」気が付くと、クリームパンを頬張つている。いやいや、今はそれどころではない。お義父さん、トイレと間違つて、お風呂の排水口でやつてしましましたね。ボロアパートの二階に住んでおり、一階は、老舗のカフェ。それこそ、お義父さんと同じくらいのお歳の方々が集う場だ。そこが、排水口からあふれ出た汚水で、雨漏りしているとのこと。家の 中も、玄関までべつとり汚水だらけだ。もう、ここにも住めないだろう。お義父さん、クリームパンを食べている場合ではないのです。ズボンの裾を汚水まみれにしてベッドに腰かけ、頬にクリームを引っ付けて、満足そうに頬張る。「そろそろ限界かもしれないな。他の人の手を借りてみよう」家族で話し

合い、お義父さんの老人ホーム入りが決まった。タクシーに揺られ、窓に引っ付いた桜の花びらを眺めるお義父さんを乗せて、老人ホームへと向かう。あのときお義父さんは、クリームパンを握りしめて、ずっと口をへの字に結んでいた。

病院から、お義父さんが危篤との知らせが届いた。梅雨空の下、夫と息子の三人でタクシーを走らせた。「やつぱり、会うの怖い。見たくない。おれは死にたくない」病院に着くと、息子が面会を渋つた。「じゃあ、先にパパが会つてくるね」夫が病室に入り、家族で来たこと、孫が恥ずかしがつて入れないことを伝えた。お義父さんはまぶたを閉じたまま、「ああ」と、しわがれた声を出した。

「このつくね、あつくねー。」

お義父さんは、私と目が合うと、ニヤニヤしながら、しようもないギヤグを連発する。

「あー、くだらない、しようもない」と言つては、一人でゲラゲラ笑い合つていた。そんな、お義父さんとのやりとりが大好きだ。実の父よりも一緒にいて居心地が良い。何とも愉快で、気心の知れた仲とは、正にこのことを言うのだろう。「次はママが会つてくるからね」息子に声を掛けて病室へ入る。目は落ち窪んで、体はやせ細り、おむつを穿かされたお義父さんが、力なく横たわっていた。夫が「俺の奥さん、お嫁さんだよ、わかる?」と聞く

と、時間をかけてまぶたをゆっくり開き、私を見た。目が合ったと思つた瞬間、わずかに唇が動いた。

「知らん。」

声にはならなかつたが、そう言つた。窓には、大量の雨粒が流れていた。廊下にいる息子の元へ行き、「おじいちゃん、ママのことがわからないみたい。そういう病気だから仕方ないね」と声を掛けると、「そうなんだ」と小声で答えた。そのまま、息子はしばらく廊下でうずくまつていた。何十分そのままでいただろうか。看護師が、何度か義父の様子を看に來た。息子はペットボトルの水を飲み、「せつかく來たんだから、ちゃんと会つておきたい」と言い、病室へ入ろうと、少しづつ動き出した。廊下を一步進んでは、一步下がり、時間をかけて、病室へ入つていく。病室の扉越しに、中を覗こうとして頭を出しては、引っ込める。少しづつ進めた歩みも、カーテン越しにおじいちゃんの息遣いを感じるところまで來た。いよいよカーテンを開き、おじいちゃんとの面会を果たす。「あ！來たよ！」夫が言うと、お義父さんはしばらく閉じていたまぶたを開いて、目玉をゆっくり右下へと動かし、孫を見つけ、じつと見た。息子は、緊張で顔が強張つていた。

「こ、こんにちは。」

再度、閉じかけたまぶたを見開いて、目玉を固定し、瞳に孫の姿を焼き付けているよう

だつた。息子は戸惑いながらも、その時間を共有するかのように、静かにその視線を受け止めていた。

まぶたが閉じかけたその時、お義父さんはもう動かないと言われた腕を伸ばし、孫に手のひらを向けた。息子が、反射的に手を差し出したその瞬間、二人は握手をした。「俺が最初に会いに来たとき、握手なんてしなかつたのに」夫が驚いて言った。それは、ほんの一瞬の出来事だつた。体の電池が切れたかのように、力なく腕を下ろし、手のひらを左手の上に重ねて、再びまぶたを閉じた。外はいよいよ本降りになり、雨音が強くなつていた。

一般部門 佳作

三重県 四日市市

## 父への託び状

一村 直子（主婦）

人の骨を見たのは人生で初めてだった。骨になつた父の姿が頭から離れず、勢いよく蛇口をひねつた。シンクに置いたままの朝食の食器が冷たい水を跳ね返す。さっきまでの黒い儀式を洗い流すように食器を洗つた。ふと、大事なことを忘れているような気がして、数時間前からの自分の動きを頭で再生させ、一瞬息が止まりそうになる。

「ん？ 持ち帰つたはずだけど、今どこに？」

慌てて洗面所へ走り、洗濯機を一時停止して蓋を開けると、ぶかぶかと輪ゴムが浮いていた。頭が真っ白になり、洗濯機に手を入れて、「きやー、どうしよう！」と叫んだ。父の遺骨を洗濯機で回してしまつたのだ。

一昨年の春、父が他界した。肺を患い、亡くなるまでの数ヶ月は寝たきりに近い状態だったが、自分の家で大好きな庭を眺めながら最期まで過ごせたことは、父にとつては何より幸せだったと思つてゐる。葬儀は家族だけで慎ましく執り行われた。子や孫たちに囲まれて、穏やかな葬儀だった。骨になつた父を見て、死とはこういうことか、と怖いような気

持ちにもなったが、人間も自然界の一部だということに、妙に納得もした。

「遺骨が欲しい方、いらっしゃいますか？」

と女性職員さんに訊かれ、私と妹は小さく手を挙げた。どこがいいかと尋ねられたので、二人同時に「指」と答えた。働き者だった父、優しく頭を撫でてくれた父、その手が、私たち姉妹には印象的だったからだろう。人差し指の先あたり、二センチほどの白い塊を彼女は慣れた手つきでつまみ上げ、それを半紙で包んで輪ゴムで緩く留めて、私たちに手渡してくれた。私は遺骨を白いハンカチに包み、黒いバッグの一番上にそっとしまった。

私の両親は、瀬戸内海に浮かぶ島の生まれだ。結婚して、父の仕事の都合で遠く離れた街で暮らすことになった。両親は島をいつも恋しがっていた。墓はこちらに造ったのだが、せめて父の一部を島へ帰してあげたい、と私たち姉妹は考えていた。そのためには遺骨を少し、持ち帰ったのだった。

自宅に着くと、ひどく頭痛がした。自分たちにまとっている線香の香りが気になり、すぐに青いパークーとジーンズに着替えた。家族皆の着ていた喪服に消臭剤を吹きかけ、夫や息子の白いシャツや彼らの靴下など、葬儀に持つて行つたものはすべて洗濯することにした。ポンポンと衣類を洗濯機に投げ入れ、意識が朦朧とするなか、惰性で私は洗濯機をスタートさせた。

洗面所で叫ぶ私の声にびっくりして、二階にいた十九歳の息子が駆け下りてきた。彼に事情を話すと、呆れた顔で、まずは洗濯物を全部風呂場へ移すよう、冷静に言われた。洗剤水を含んだビシャビシャの衣類を、私はすぐ隣の風呂場へ運び出す。床も悲惨なほどに水浸しになつたが、気にしてはいられない。父を救い出す気持ちで、絡まつた洗濯物をひとつひとつ丁寧に剥がしながら、骨を探した。

「どうしよう、碎けたらわからなくなるよね。じいちゃん、成仏できないわ。」  
と嘆く私を、息子は励まし続け、

「母さん、これやん、白いのがある！」

と、父の骨を見つけてくれた。少し欠けた破片も二つ見つかった。それらを洗面所で洗つてティッシュで拭き取り、キッチンペーパーの上で乾かした。遺骨をこんなふうに雑に扱つてもいいのかどうか心配になり、自分の失敗に気が滅入つた。落ち込む私に、息子が言つた。

「じいちゃんは瀬戸内海の島に早く帰りたかったんやろ。細胞なら排水溝を通して下水から海へ出て、瀬戸内海まで行けるやん！だからさ、あまり気にしやんでもいいって。」

そんな慰めに、私は思わず吹き出し、気持ちが少し救われた。きれいな緑色の空箱に父の骨をそつと入れて、リビングの棚に置いた。その上に父の遺品のメガネを乗せ、笑っている父の写真も添えたら、私専用の仏壇ができた。その日から毎日、懺悔の気持ちも込めて私は

緑の箱に手を合わせ続けた。

翌年の秋、初盆も終えたので、妹と瀬戸内海へ父を連れて行くことにした。両親の故郷の島に来るのは久しぶりだつた。私と妹は、迷うことなく島の小さな港を目指した。以前は船着き場として賑わつていたが、しまなみ海道が開通し、今では桟橋も閉鎖され、港には誰もいなかつた。そこから少し離れた海岸から、父の遺骨を散骨することにした。

細かく碎いた遺骨を手で摘まみ、深緑色の海へそつと撒くと、太陽に照らされた小さな粒がキラキラと光つて、ゆっくり、ゆっくりと底へ沈み、海と一緒になつた。その厳かな光景に、私は涙が溢れた。そしてようやく、あの失敗を許されたようにも思つた。

今でも毎朝、私専用の父の仏壇に手を合わせる。写真の父が「粗相をしないように気をつけろよ。」と、私に今日も笑いかけている。

# 令和 7 年度 第 11 回 藤原正彦エッセイコンクール

## 概 要

### ■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

### プロフィール

昭和 18 年 旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。  
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。  
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。  
昭和 53 年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成 22 年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成 26 年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。  
そのほか、『国家の品格』『本屋を守れ』『美しい日本の言霊』など著書多数。  
平成 26 年 4 月、姫路文学館長に就任。近著に『藤原正彦の代表的日本人』。

### ■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400 字詰め原稿用紙 5 枚以内。

日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和 7 年 9 月 18 日締め切り。

### ■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各 1 編。  
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）  
を贈呈。

### ■ 応募状況 … 応募総数 1,931 点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	547 点	331	189	520	27	0
高校生部門	761 点	380	309	689	72	0
一般部門	623 点	41	74	115	507	1
合計	1,931 点	752	572	1,324	606	1

中学生部門：市外では、兵庫県宝塚市、加古川市、明石市、赤穂市から、県外では、東京都、  
青森県、愛知県、熊本県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は 9 校であった。

個人応募者は 5 人であった。

高校生部門：県外では、東京都、千葉県、山梨県、愛知県、京都府、広島県、徳島県、福  
岡県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は 10 校であった。

個人応募者は 10 人であった。

一般部門：北海道から沖縄県まで、全国から応募があった。

ドイツ在住の日本人からの応募もあった。

### ■ 表彰式

日時：令和 8 年 1 月 18 日（日）午後 1 時 30 分～3 時

会場：姫路文学館 講堂（北館 3 階）



## 第11回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

---

編集・発行 姫路文学館

〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地

TEL (079) 293-8228

---

令和8年(2026年)1月18日発行